393-756
1200501462617

東亞研究講座
第三十四輯

水野梅曉著

支那佛教の沿革

東亞研究會

始

393-756

內容

一　佛教の傳來に就て……一
二　佛教の傳來と道教の嫉視……二
三　佛經の飜譯に要したる年月……三
四　年と共に增加せる大藏……四
五　日本の大藏と支那……七
六　支那佛教發達の基礎……八
七　理智的の佛教……一〇
八　隋唐に勃興せる支那の佛教……一一
九　禪淨の二門と支那……一四
十　法相宗と眞言宗……一九
十一　喇嘛教の流通と其の地方……二一
十二　清朝以後に起れる居士佛教……二四
十三　古代に於ける支那佛教の概觀……二七
十四　南北朝より六朝に至る概況……三〇
十五　唐以後に於ける佛教の概括的結論……三四

昭和三年九月十日 南園文庫

支那佛教の沿革

水野梅曉

(一)佛教の傳來に就て

佛教が支那に傳來したるは、佛滅後一千〇十六年（即ち西暦六十七年）後漢の明帝永平七年説と十年説の二者あるも、要するに其の差は僅に三年に過ぎざるを以て、予は普通一般に行はるゝ永平十年説に據りて、本篇を記述することゝした。しかしこれは、佛教が正式に漢の帝室に傳へられたのが、永平十年（或は七年）と云ふことであつて、其の以前より既に民間には佛教が傳來して居つたことは明かである。何となれば帝が夢に金人（佛像）を見たが、これは何物であるかと云ふ問に對して『通人傳毅は奏して、天竺の佛である』と爲し、之れに依りて郎中蔡愔、博士王遵等十八人を遣はして、之れを迎へしめたと云ふ事共れ自身が、既に通人たる傳毅には、光明赫灼たる金色の人は即ち佛であると云ふ常識が出來て居つたと云ふことが判るのである。

故に予は佛教が永平以前に於て、既に民間に傳布しつゝあつたと云ふことは、右の如き帝と傳毅との問答に據りても、之れを證して餘りあるを以て、其の他の諸説は略することゝしたるが、只秦の始皇の時代には、既に沙門室利防等十八人の來化を見たとか、前漢武帝元狩年間（即ち西曆紀元前一二二より一二七年に至る）に霍去病が匈奴を征し、金人を得て歸りたれば、帝は香華を備へて甘泉宮に於て之れを禮拜したと云ふが如き記事が非常に澤山あるから、佛教は周末以來西域との交通が頻繁となるに連れて、漸次に一般的に行はるゝことゝなつたと云ふだけに止めて置く。

（二）佛教の傳來と道教の嫉視

佛教は武帝の派遣せられたる使節に依りて、永平十年月支國より迎へられ、摩騰、竺法蘭の二僧が、佛像經卷を白馬に駄して、首都洛陽に到着するや、帝は大に喜んで伽藍を建て、之れを白馬寺と名づけ、四十二章經を漢譯した。此れが漢土に於ける佛教寺院の建設と、譯經の始まりである。然るに在來宗教たる道教は、帝が在來宗教以外に外來の佛教を優遇すると云ふので、大に之れを嫉視して、五嶽の道士楷善信等は、永平十五年正月（或は十四年正月説もあり）上表して、佛教と其の優劣を鬪はさんことを請ふた。

此に於てか帝は其の請を許して、尚書令宋庠を遣はし、白馬寺に於て其の法を角せしむることゝなつた。依つて道士側では南嶽の楷善信、華嶽の劉正念、恆嶽の桓文度、岱嶽の焦得心、嵩嶽の呂惠通以下六百九十人に出りて、三壇を寺の南門外に築かれ、西壇には道家の符籙を安置し、中壇には黄帝、老子等の書を安置し、東壇には祭器、食物等を安置し、諸神に祈禱した。佛僧側では道路の西側に佛舍利、經像を安置したるのみなりき。然るに此の時道衆は火を放つて壇を焚き、其の聖典が火にも焚けざることを示さんとしたるに、焉くんぞ知らん、彼等の聖典は悉く灰燼に歸したるに佛舍利は空中に飛舞して、種々の神變を現はしたので、觀るものは皆佛教に服し、呂惠通以下六百二十餘人の道士、及び内宮の婦人二百三十人は一時に出家したれば、帝は特に所司に命じて七僧寺を城外に、三尼寺を城内に建立せしめられた云々の説あるも、予は其の信疑を知らざるが、要するに其の法力を角せられたことだけは、之れを信じ得らるゝと思はれるのである。

（三）佛經の飜譯に要したる年月

右の如くにして、道士との衝突を見たるも、之れは一時的の現象であつて、永久に其の衝突を繰返へしたるものに非らず、否寧ろ道教は其の佛教の思想及び組織を取り入るゝことに汲々として、在來の道教とは其の內容を殊にするものとなりたることは、道教の思想的發達を直視すれば明かなるを以て、予は玆に之れを贅せぬことゝし、佛教が驚くべき勢を以て、漢譯せられたる狀況を一瞥することゝした。

由來梵文を飜譯して、文字及び其系統を異にする佛教を漢譯したと云ふことは、世界の文化史上に於ける一大偉觀にして、後漢の永平十年以來開始せられたる飜譯は、爾後宋の眞宗皇帝咸平元年までも繼續せられたるを以て、其の譯經に從事せられたる年月は、無慮一千〇六十一年(西曆紀元前六七年より紀元九九八年に至る)に亙つて居る。故に其の間に飜譯せられたる佛經は、實に數千卷の多きに達して居る。是れが所謂佛教の大藏であつて、其の卷帙の浩瀚なることは、恐らくは世界無比であると思はれる。

(四)年と共に增加せる大藏

試に其の年と共に其の卷帙を增加したる、佛教叢書たる大藏の編纂を列記すれば左の如し。

一、蜀版　宋の開寶四年より宋の太平興國八年(即ち西曆九六六年より九八三年に至る)までに出版せられたる大藏の卷數は五千〇四十八卷であつた。

二、福州東禪寺版　同元豐三年より崇寧三年(西曆一〇八〇年より一一〇四年に至る)間に出版せられたる大藏は、六千四百三十四卷であつた。

三、福州開元寺版　南米政和二年より紹興二十一年(西曆一一一二年より一一五一年に至る)間に出版したるものにして、其の卷數六千百十七卷であつた。

四、思溪版　紹興二年(西曆一一三二年)頃の出版に係り卷數は五千九百十八卷である。

五、杭州版　元の至元十五年より同二十六年(西曆一二七八年より一二八八年に至る)間に出版せられたるものにして、卷數は六千〇十卷であつた。

六、明南藏　明の洪武五年(西曆一三七二年)の出版に係り、其の卷數は六千三百三十一卷であつた。

七、明北藏　明の永樂十八年より正統五年(西曆一四二〇年より一四四〇年に至る)間に出版せ

られ、其の卷數は六千三百六十一卷であつた。

八、武林版　明の萬曆十七年（西曆一五八九年）に出版せられ、卷數は六千七百七十一卷であつた。

九、龍藏版　清の雍正十三年より乾隆三年（西曆一七三五より一七三八年に至る）間に出版せられ、其の卷數は七千八百三十八卷であつた。

十、頻伽藏　清の宣統三年より民國二年（西曆一九一一年より一三年に至るの間に出版せられ、其の卷數は八千五百三十四卷であつた。

十一、續藏　民國十二年（西曆一九二三年）の出版に係り其の卷數は七千百四十四卷であつた。

以上は佛教の消長を卜する唯一の標準と爲すべき、佛教大叢書たる大藏經の出版年月と其の內に包含せられたる卷數であるが、其の最初の出版に係る西曆九六六年の蜀版より最新の一九二三年に出版せられたる續藏に至るまでには、約一千年に亘りて十一回以上の出版を見たるのみならず、其の卷數は民國以來の出版に係る頻伽藏と續藏とを合すれば、一萬五千六百七十八卷と云ふ浩瀚なるものとなつて居る。此れは經論の註釋其の他佛教に關する著述中の主要なるものを、藏經に編入せ

られたるものであるから、卷數の增加は即ち佛教學の發達を物語るものである。

(五)日本の大藏と支那

而して其の間に見逃がすことの出來ない問題は、清末の宣統三年より、民國三年に亘りて出版せられたる頻伽藏は、明治初年に日本東京に於て、宋元明の各藏及高麗版を綜合校正して出版したる縮刷藏經の飜刻に係り、續藏も亦京都に於て各宗の高德の撰述に係るものを、編輯して續藏と名づけて出版せられたるものを、上海に於て影印として出版せられたるものなれば、支那に於ける最近の出版に係る二藏は何れも皆直接日本に於ける出版の影響を受けて、之れを出版せられたるものなれば、歷史は繰り返へすと云ふ原則よりすれば、過去に於ける約一千年間は、其の全部を支那に仰ぎたる日本佛教が、一千年後の今日に至りては、逆に日本の編纂に係る大藏經の正續二藏共に、支那に於て飜刻せられたと云ふことは、文化の發達及び循環の徑路を概觀する上に於て、洵に興味深きものがあると云はねばならぬ。

殊に大正十二年四月より、高楠順次郎、渡邊海旭兩氏に依りて出版せられたる『大正新修一切經』

は正藏五十五冊一萬二千八百六十四卷を以て、昭和四年二月に完成せられ、今又其の續藏として二十八冊三千九百九十二卷を出版中であるが、其の完成は昭和七年十二月の豫定であるから、此の正續二藏が完成すれば佛教に關する文献としては世界中で於て本書の右に出づるものなくして、世界の學界に寄與すること頗る大なるものである。就中此の大出版は、世界の學佛界に貢献すること大なるものがある。

何となれば、右の內續藏の豫約者は未だ其の確數を知るに由なきも、正藏に對する支那の豫約申込者は八十餘名に達して居るが、其の中には其省の省立圖書館又は其の他の公立學校も含んで居るが、個人としての購讀者が多數であつて、其の中には聶雲台、梅光羲、韓清淨、徐鴻寶、王一亭、劉壽樞等の居士もあり、又政治家では段祺瑞及び故人になつた雲南の唐繼堯の如き人物もあつて、支那の南北を通じて此の新修大藏經が行き渡つたと云ふことは、獨り日本の學界に寄與するのみに非ずして、支那の學界に貢献すること大なるものありしことを此の機會に一言して置く。

(六)支那佛教發達の基礎

佛教は其の源を印度に發したるも、前述の如く後漢の永平年間に東漸して支那に傳はりたるが、其の當時は未だ後世の所謂宗派なるものなくして、只佛說に依りて修行し、生老病死の苦海を渡ると云ふものなりしが、其の修行の方法は戒律に依りて、身口意の三業を清淨にすると云ふことを前提として、各種の法門を修行したものであつた。而して其の戒律にも自ら生老病死の苦海を渡ると云ふ小乘戒と、自己を後にして他を先づ度せしむると云ふ大乘戒の二種ありしが、此れは其の大たると小たるとを問はず、上代にありては、學佛者全部が其の何れかを遵奉するものであつた。

然るに今世に至りては、學佛者と雖も佛說に據りて修行するものゝみでなくなつた結果、唐に至りて南山の道宣律師は、出家するものは先づ戒律を以て其の起程と爲し、一切の非法に還ざからざる可らずと云ふ趣旨より、戒律を提唱して學佛の指針とした。故に唐以後は其の宗派の如何を問はず、苟くも僧として修道するには、必ず先づ戒を受けて、之れを護持すると云ふことゝなつたのは支那に於ける佛教發達史の上より見れば、律宗の提唱は實に重要なる出來事であつたと同時に、佛教としての基礎は道宣律師に依りて確立せられたと云ふことを得るものであつた。

(七)理智的の佛教

南山の道宣律師は、高妙なる理智を研究するにも、先づ其の身を修めることを第一歩として其の身よりして心に及ぼさしめんとするものなりしが、之れと前後して倶舍、成實、三論等の宗派が勃興した。此の倶舍宗は印度の世親菩薩が佛滅後九百年代に造りたる倶舍論を陳代に眞諦（西天竺の人）が支那に來りて飜譯したるも、其の傳を失したるに依り、唐の玄奘三藏が之れを再譯したるものを基礎として、普光が記を作り法寶が疏を造りて弘流したるものである。其の要旨は『一切の諸法は實有なり』と主張するものであつて、佛教の普通の解釋に由ると一切の諸法即ち森羅萬象は、其の實體を有するが如くなるも、之れも詳細に觀察する時は、悉く空であつて實體は無いものであると云ふに反して、此宗は一切の萬有が、即ち萬有の實體であると云ふものである。

次に成實宗は、龜玆國の人羅什三藏が印度の訶梨跋摩の造りたる成實論を譯したるものなるが、此の宗は『人空、法空の二者を立て、無我の理を悟らしむるものであつて、此に由りて二十七の賢聖の道を修めしむるものである』故に本宗は小乘教を修むるには、最も合理的のものとせられて居

る。

次に三論宗は、印度の龍樹菩薩の造りたる中論及び十二門論と、龍樹の弟子提婆菩薩の造りたる百論の三者を祖述するものであるが、本宗の要旨は『無所得を以て究竟と爲し、般若の眞空に合せしむるものなれば、外道の執着及び小乘の着相を破するものである』故に本宗は性空宗とも名づけられて居る。

以上は何れも皆唐以前に行はれたる宗派であるが、其の系統は悉く印度の論理學的の影響を受けて、理智的方面より佛教を解釋したるものなれば、後世の所謂宗教と云ふよりも、寧ろ哲學的の思索に傾いたのもであつた。

(八)隋唐に勃興せる支那の佛教

右の如く小乘佛教の論理的研究と共に、眞空の理を說いて、人類の迷執を打破する宗派は、前記の如く唐以前に於て行はれたるも、唐の中葉以後に至りて、大乘佛教の勃興と共に、此等の宗派は皆新興宗派たる、天台、華嚴等に併合せられたのである。故に之れを大なる眼を以て見る時は、陳の世

に發芽して隋に至りて大成せられたる天台とか、唐の世に大成せられたる華嚴の如きは、全く小乘の範疇を脱したる、純大乘であると同時に、或る意味に於ては『支那の國土の上に、支那の思想を加味して發達したる支那の佛教である』と云ふことが出來るものである。

何となれば、天台宗は北齊の慧文が龍樹の旨を悟りて、空假中の三觀を修して中道の妙諦に入らんとせしものなるが、其の道は南嶽の慧思禪師に傳へられ、慧思は之れを天台の智者大師に傳へたるものなるが、智者に至りて大に其の道を明かにし、如來一代の說法を五時（第一華嚴、第二阿含、第三方等、第四般若、第五法華）に分ち、第一時には法界無礙の眞諦を說きたるも、其の機未だ其の法を受くるに堪へざるを以て、阿含時代に於ては苦集滅道の四諦の法門を說いて小乘の機を接したるが、漸く小乘の機の純熟するを俟つて其の著相を破する爲に方等を說き、其の著相を破したる後に於て般若眞空の理を說き、而して後法華に至りて、諸法實相の妙諦を說くと云ふ綜合觀の上に、各時代と其待機の人とを分ち、更に此の五時の說法は、藏敎と稱して經律論の三藏共に主として小乘を旨とし、大乘を傍とするものと、通敎と稱して大乘を主として小乘を從とするものと、別敎と稱して、單に大乘の菩薩の爲に、大乘の法を宣說せるものと、圓敎と稱して最上根の菩薩の爲に中道實相をとくものゝ四敎に分ち、之れを化法の四敎として居るが、更に又化義の四敎と稱して頓、漸、秘密、不定の四敎に分ち、頓敎は讀んで字の如く大機に對しては頓に大乘を說き、漸敎は徐々に說法して之れを誘引し、秘密敎とは特に其の人の爲に說法し、不定とは同一座中にありと雖も、其人に依りて、其の解釋が一定せざるを云ふのである。

以上は天台智者大師が、如來一代の說法及び其說法の內容を大別したる解釋であるが、其の解釋其の物が即ち天台學の大系と爲つたものであると同時に、法華を主として、三止、三觀、六即、十乘等の法に依りて、修行せしむるものである。華嚴宗は唐の杜順和尙が、華嚴經に依りて觀を立て、之れを智儼に傳へ、儼は之れを法藏（賢首大師）に傳へ、藏は之れを澄觀に傳へたるが、本宗を大成したるは即ち法藏であるから、一名之れを賢首宗とも稱せられて居る。

本宗の要旨は四法界、十玄門、六相、五敎を立て、學者を誘引して居るが、四法界とは一、事法界、二、理法界、三、理事無礙法界、四、事々無礙法界を立てゝ、一切の事物と理法とは十重無盡にして始まる處もなく、終る處もなき所以を明かにすると同時に、十玄、六相を以て之れを十分に說明したる後に於て、天台と等しく佛敎の全體を系統的に說明したるものが、即ち華嚴宗である。

故に此の天台、華嚴の二宗は佛教中に於て最も發達したる大乘を、哲學的體系を以て說明するに、支那の文字と支那の哲學を加味したものであるから、此の點に於て、此の二宗は、支那に於ける第二の國學と云ふ地歩を占め、最近十年來非宗教運動より、非基督教と云ふ運動が起つても、佛教は第二の國學として之れを排斥する能はざる狀態となり、又近世に於ける哲學研究の大家と稱せらるゝ、胡適氏も上古の哲學史は、漢民族特有の思想を以て處理し得ても、漢以後の哲學は大乘佛教を無視しては執筆する能はざるを以て、新たに其の方面の資料蒐集に努力したるは、極めて有名なる事柄である。されば以上の說明のみを以てしても、支那學として發達したる天、華二宗の學問上に於ける地位が明かであると思はれる。

(九)禪淨の二門と支那

佛教には由來聖道、淨土の二門があつて、聖道と云ふ方面は自己の理性によりて、理智と實行の兩者を完備して、一切の環境に於ける拘束を離れて、解脫の境致に到達せんとするものにして、其の實行の困難なることは、動物性を多量に所有せる吾人には、殆んど不能の點があるので、聖道門は一名難行道と唱へられて居る。然るに其の又半面には、吾人が有せる理智と、吾人が有せる理想とを極めて雄大にして、しかも精微を盡したる方法を以て、完全なる組織と爲せる淨土門なるものを建設して、吾人が堪へ得ざる程の克己心も要せず、亦あらゆる周圍の環境をも、悉く之れを超越して、一度び其の願力を信ずれば、何人にても安穩に其の理想境に到達し得ると云ふものなれば、淨土門は一名易行道とも唱へられて居るが、更に之れを換言すれば、聖道門は自力宗と唱へ、淨土門は、之れを他力宗と唱へられて居る。

而して此の思想は如何なる時代に發達したるかと云ふに、佛滅後七百年後に出世したる龍樹菩薩に依りて提唱せられ、無著、世親（佛滅後九百年代）等の諸菩薩に依りて、益之れを高潮せられ、支那に於ては、北魏の曇鸞、道綽より、唐の善導大師に依りて大成せられたのが淨土門である。故に天台、華嚴、三論其の他の諸宗が、聖道門で建立せらるゝ一面に、淨土門が支那に於て發達したと云ふことは、支那の哲學史より云ふも、思想史より云ふも、將た又佛教發達史より云ふも、極めて興味ある問題であると同時に、曇鸞、道綽、善導に依りて大成せられたる思想が、日本に於ても源信、源空、親鸞等の諸祖に依りて鼓吹せられたるは、印度以東の佛教を大觀する上に於て、最も重

要なる事件である。

然るに、支那の佛教は梁朝より唐に到りて、殆んど百花が一時に共の花を發するが如く、特筆大書すべき禪門の勃興を見たのである。禪は一名佛心宗と唱へて、聖道、淨土の二門が、或は自力に依りて或種の過程と階級を經て、時間的にも空間的にも、思慮を超越する時間を要して成佛と云ふ極地に達するものなるに、此の佛心宗は端的に云へば『一朝直入如來地』と云ふて、苟くも一念發起して如來の心地に透入すれば、即心即佛であると云ふ法門を唱へた。而して其の行程と方式は全然相異るが如きものあるも、他力門が自己には何等の能力なきものとするも、彌陀が大願に依りて、大行を成就し、其の結果何等の不淨も、恐怖も、憂患もなき極樂淨土を建設した。故に吾人は何等の思慮分別の作爲を用ゐずして、彼の願力を信じ、彼の國土に生れんとするの願を發すれば、直に彼の國土に往生することを得ると云ふ思想と相似たるものである。

勿論其の思想的內容と其の體系とに於ては、兩者は決して一致して居らぬが、其の結果に於て無限大の努力と無數の階級を經て、漸く佛地と云ふ極點に達するとするものに對し、淨土門は一切の思慮分別を離れて、其の願と行とを信じて、其の願と行との力に乘ずれは、吾人は何等の意識を用

ひずして、直ちに彼の國に生じ得ると云ふは、恰も渺茫たる大洋の浪を泳ぎて彼岸に達することは何人にも極めて困難なるも、鞏固なる汽船に搭ずれば偉丈夫たらずとも、婦女小兒も安穩に太平洋を橫斷し得るものであると云ふのであるから、實に破天荒の事柄であつたと云はねばならぬ。

然るに禪の法門に至りては、更に又一歩を進めて、彼の願と行とを信じて其の船に乘じて、大海を渡ると云ふよりも『直ちに人心を指して、性を見れば成佛する』と云ふのであるから、唯心的の自己省察を基本として、一切の時間と階級とを超越するものなれば、恰も汽船にて數月を費やす所を、快速力の飛行機に依りて數時間にて到着するが如きものである。否數日を費やして始めて到達し得る信書がラヂオに依りて、瞬間に其の目的地に通話し得るが如きものであるから、此の禪門の發達は精神科學の發達を見る上には、淨土門と併せて之れを見逃がすことの出來ない大なる變化を示したるものである。而して其の特色ある禪門は如何にして發達したかと云ふに、南天竺の達磨大士が、梁の武帝大通元年（西曆五二七年）海路より廣東に到着したる以來のことである。

故に此の達磨の東渡は、支那の佛教界に絕大なる影響を與へたるものであるが、之れも見方に依りては、後漢の明帝永平十年（西曆六十七年）より大通元年（西曆五二七年）に至る約六百年間に

亘りて、弘通せられたる法門は、大體に於て人天有漏の因果を說くに非らずんば、煩瑣なる階級的の徑路に依りて、佛地に到達せんとするものなれば、其の敎網は彌々張られて彌々密なるものとなつて來ても、其間に何等の自由もなく、潑溂たる生氣もなくなりし爲め、大乘佛敎の精神を發揮する爲には、大士の渡來は眞に時代の欲求に應じたるものにして、佛敎の精神は此に復活したるものと云ふことも出來るのである。何となれば大士は、釋尊二十八世の嫡傳として支那に行化したるものなれば、他の僧が經卷佛像を携へ來りて、競ふて之れが飜譯に從事し、又伽藍建立に沒頭せるに對し、大士は空手にして來り、武帝に金陵(今の南京)に謁して、帝の著相有爲の法門に墮するを喝破し、直ちに魏(今の河南)の少林(嵩山)に隱れて、面壁九年の後第二祖慧可一人を得て、如來嫡傳の大法を傳へた。此の法門は後世に至りて臨濟、曹洞、雲門、法眼、潙仰、黃龍、楊岐の七派に分れ、唐宋元明の四朝を通じて支那の敎界に獨步したるのみならず、我國にも土御門天皇の建仁年間以來、明末より清初に至るまでには、二十四流と稱せらるゝ多數の流派が傳來せられたのである。

(十)法相宗と眞言宗

右の外に支那の佛敎界には、法相、眞言の二派が提唱せられた。此の法相と云ふのは、印度に行はれたる性、相二宗の中の一であつて、其の性宗と名づくるものは、三論の如きものであつて、空理を明かにするにある。而して空理を明かにすれば、眞性自ら顯ると云ふにあるが、相宗は先づ我法を破して後に實圓を彰はすと云ふにありて、諸法の性相を決判するのが即ち本宗の要旨である。而して其の諸法の性相を決斷するには、五位、百法を以て一切の法門を攝取し、之れに三支の比量を立て、邪を摧き正を顯はし、徧計執を去つて圓成の實性に證入せしむると云ふ、細微詳密を極めたる論理學的法相を以て、性相を說明するものであるが、其の要旨は『三界唯心、萬法唯識』と稱して、唯心哲學を高調したるものである。

故に此の法相宗は支那に傳來する以前より、既に印度にありても、彌勒菩薩を初祖と爲し、無著、天親、護法等の諸菩薩の相傳せるものにして、唐の玄奘が印度に留學して戒賢論師に就いて此の法を學得したるものである。此の宗は玄奘より窺基に傳へられ、窺基より慧沼、智周に傳へられた

るが、日本には奈良朝の始めに、道昭法師が入唐して之れを傳へたるを以て、支那に於ては其の典籍を失ひたるに、我國には之れを保有せられたるを以て、清末に於ける弘敎の大家故楊仁山居士は、故南條文雄博士に依りて、古佚書を取回覆刻して再び斯學を提唱せらるゝことゝなり、法隆寺の佐伯貫主は支那に巡錫して、斯學を講演せらるゝと云ふ有樣であつて、近時頓みに旺盛なる研究を見ることゝなつた。其の理由は本宗が極めて論理學的に、佛敎の哲理を說明するを以て、之れを西洋哲學に比しても何等遜色なきのみならず、寧ろ一頭地を拔くものがあるからである。

次に眞言宗は、佛滅後七百年にして、印度の龍猛菩薩が南天竺の鐵塔を開いて、金剛薩埵に遇ひ薩埵より灌頂を受けたと云ふものなるが、此の金剛薩埵は大日如來より秘密の法門を親承したるものである。故に一名本宗を密宗とも稱せられて居る。されば本宗は金剛薩埵を以て始祖と爲し、龍猛は之れを龍智に傳へ龍智は之れを金剛智三藏に傳へたるが、此の金剛智三藏の來唐前に、善無畏三藏が唐の玄宗皇帝開元四年(西曆七一六年)長安に來りて、此の法を弘通し帝の尊崇を受けて大日經以下の經典を飜譯した。爾後開元七年金剛智三藏は、其の徒不空と共に、海路より廣東に來着し、其の翌年入都して此の法を弘通した。

故に支那に於ける本宗の開拓者は善無畏三藏にして、其の正統たる傳法者は金剛智三藏と云はねばならぬ。何となれば善無畏には其の後繼者なかりしも、金剛智には不空三藏は勿論、支那人では有名なる一行禪師等の門弟を有し、不空の弟子には惠果阿闍黎等があつて、其の傳統を傳へたるのみならず、我國の弘法大師は惠果に從ふて其の學を傳へ、支那に於ては其の傳統を失ひたるに、我國では今猶之れを傳へつゝあるを以て、清末以來故楊仁山居士は、其の復興を謀りて門人故桂伯華に命じて、日本に留學せしめたるも、不幸にして夭死したれば、爾後有志の學徒が高野山に留學し、現在では密林弘傘等の阿闍黎も支那に還りて、斯學を提唱しつゝあると云ふ有樣となつた。

(十一)喇嘛敎の流通と其の地方

以上述べた所に依りて、支那に於ける佛敎の沿革は大體に於て之れを終りたるが、此の外西藏、內外蒙古地方に行はるゝ喇嘛敎なるものがあることを見逃がすことは出來ない。喇嘛敎と云ふは西藏語であつて、支那に飜譯すれば『無上』と云ふ意味になるものなるが、更に之れを換言すれば、和尙と云ふが如きものにして、世界最尊最上の敎であると云ふのが即ち喇嘛敎である。此の喇嘛敎

の行はれる地方は、漢以來烏斯藏と稱せられたる印度と大戈壁の中間にある高原地帶であつて、唐の太宗の皇女文成公主が烏斯藏汗に降嫁して、其の妃となりし時より、汗が妃の尊信する佛教の寺院を建立すると同時に、印度より高德の喇嘛（和尙）を延請したる以來、始めて西藏に佛教が行はるゝことゝなつたのである。

爾後宋元明清の各朝を通じて、高德の喇嘛が出世したる中に就て、元の世祖が尊信したる八思巴が帝師となりて、蒙古文字を製作したる以來、大寶法王の號を賜ひたるが、其の號は爾來世襲せられて、八思巴の弟子より弟子に傳へられ、其の衣に紅色を用ゆるを以て、世人は之れを紅教派と稱して居る。然るに此の紅教中に哈立麻と稱する大德が現はれて、明の永樂年間に成祖より大寶法王は、更に西大大善自在佛に加封せられ、其の徒三人は皆國師に封ぜられ、終に法王は五人、灌頂大國師九人、灌頂國師十八人と云ふが如き多數の封號を有するものが出來たので、彼等は互に相爭ふこととなり、又法王は其の位を弟子に傳ふるよりも、我子に傳へんと欲して、先づ妻を娶つて子を生みたる後、再び喇嘛となり、命終の後其の子を以て之れに代らしむると云ふが如き有樣となり、其の弊言語に絶するものがあつた。

故に明の永樂十五年、青海の西寧衞に生れたる宗喀巴は、先づ紅教に投じて出家したるも、彼等は神通と稱して專ら刀を呑み、火を吐く等の奇術に類することにのみ沒頭し、戒定慧の道を修めざるを以て、終に其の衣冠を改めて黃色に變じ、其の宗風を一變したのである。故に後世此の派を稱して黃衣派と云ふに至つた。其の大弟子二人ありて世々呼畢勒罕（轉生）して本生に迷はず、能く夙世のことを知り、還り來りて掌教の牀に坐し、以て一切の衆生を度せしむることゝした。其の二大弟子とは、即ち達賴、班禪の二人であつた。

此の第一世達賴の大弟子哲卜尊丹巴なるもの、一系は、庫倫に住して活佛と稱し、世々轉生し來るものとせられて居る。又第五世達賴の弟子章嘉呼土克圖は淸の雍正年間に國師に封ぜられて、北京に常住せしが、彼も亦能く本生に迷はずして轉生するものと稱せられて居る。乾隆以後は達賴、班禪の兩大喇嘛に前後の兩藏を分治せしめたるが、乾隆年間の第六世達賴の管轄する寺院は三千百五十餘所、喇嘛僧の數三十萬二千五百餘人、班禪の管轄寺院は三百二十七箇所、喇嘛僧は一萬三千七百餘人であつた。

布魯特二部には紅教も猶若干存在せしが、其二派の合計三十四萬千二百餘人を算した。此の外轉

生し得る活佛と稱せらる階級者中の呼土克圖と稱する者、西藏に十八人、沙布隆と稱するもの十二人、漠北の外蒙古に十九人、漠南の內蒙古に五十七人、青海地方三十五人、四川の察木多番地に五人、北京駐在者十四人、合計轉生の資格百六十人と云ふことに登錄せられたのは、即ち乾隆年間の事であつたが、當時は右の地方に住する浮土克圖には、人民統治の權を與へて官吏を置かずして、彼等に統治せしめたものなれば、其の權力は實に絕大であつた。而して其の呼畢勒罕以下に、種々の階級ありしも、玆には之れを略することゝした。

(十二)清朝以後に起れる居士佛教

支那の佛教は其の渡來以後歷代の學者が之れを信奉し、且つ開明し來れるも大體に於ては居士よりも僧侶の手で依りて之れを弘通し、且つ開明せられたものであつた。然るに乾隆以後の支那の佛教は、僧侶の手より居士の手に移つて、之れを護持せられたのである。其の理由は康熙帝以來の國策として、人心を收攬する爲め、儒者を懷柔したる結果、儒者より排佛論を持ち出され、從來の如き僧侶の優待を停止したる爲め、僧侶の中より人物輩出を見ること少なくなりたるは、清の中葉以後に於ける一變化なりしが、さるかはりには僧侶以外の居士中より人物の輩出したることも、清朝佛教史に於ける一大特色であつた。故に予は左に其の概況を述べることゝした。

明末に於ける支那佛教の風尙は、禪學旺盛なりしを以て清初にも尙其の遺風を承けて、錢牧齋、尤西堂を始め、乾隆、嘉慶年間には羅台山、彭尺木等の居士も皆禪門に歸した。然るに清の中世以後の龍定庵及び魏源の如き居士は、皆佛典を研究したるのみならず、魏源の如きは晩年に戒を受け、又無量壽經の會釋を著はしたるが、龍定庵の如きは、廣く釋典を閲みし、且自ら前世は某寺の僧であつたと稱する程であつた。しかして近年まで在世せし康有爲、梁啓超及び戊戌政變の犧牲となつて國に殉じたる、譚嗣同の如きは、皆龍定庵を崇信した。就中譚嗣同は有名なる楊仁山に私淑して、造詣頗る深く、三十三歲にして刑場の露と消ゆるまでには、仁學と稱する人我一體の哲學を形成し、有淸一代の思想界に氣を吐いた。

其の外にも亦宋恕、夏曾佑、蔣智由、章炳麟等の諸氏が現はれて、學界に優位を占むる以外に、佛學の方面に於ても、廣く釋典を觀て深く相宗の旨を究はむるもの多き中に於ても、章氏は哲學的の理路に依りて佛教を解せんとするの風を發生した。故に佛教に對する態度は一變して、單なる傳

統的の解釋に甘んぜず、進んで西洋哲學と比較研究を爲すものあるに至つた。從つて清末の居士は華嚴、法相を究はむるもの多く、支那に於て散佚せる典籍は殆んど我國より還元覆刻せられ、佛教は寧ろ一種の學問として研究せらるゝことゝなり、吾曹は佛學を好むも佛教を好まずと云ふが如き奇矯の人物もあるが、要するに羅台山、彭尺木以來は、禪以外に淨土を修する居士と、華嚴、法相を研鑽するものとの兩派を生じたるが、僧侶よりも居士の手に依りて佛教は維持せられて居る。

試みに現在に於ける居士中の著名なる人々を列擧すれば、段祺瑞、王揖唐、葉恭綽、陳銘樞、楊樹莊等の軍人政治家の外に、梅光羲、劉壽樞、聶雲台、王一亭、狄楚青、黃涵之、徐鴻寶、韓清淨關絅之、歐陽漸、蔣維喬等の大居士があつて、印光、諦閑、圓瑛、太虛、仁山等の諸法師を羽翼しつゝあるの狀態なれば、支那の佛教界より居士を除けば殆んど觀るべきものなきものとなる。故に南京に於ける支那內學院も、北平に於ける三時學會でも、上海に於ける淨業社及び世界佛教居士林でも、皆居士の倡設に係るものであるのを見ても、清末より民國に至る佛教の趨勢を知ることが出來るのである。

(十三)古代に於ける支那佛教の概觀

以上の記述は極めて概括的に、佛教が支那に傳來せしより以後の飜譯出版、並に各派の發生せる狀況に及びたる後、更に現在に於ける居士佛教までに至りたれば、大體に於ける支那佛教の沿革は、既に之れを盡くしたるものなるも、其の記述は頗る一班的であつて、其の詳を悉くさざりしものなれば、本項に於ては編年體に依りて、後漢の永平年間以後の、佛教の消長に關する大事を標出して、其の記述の缺漏を補ふことゝした。

一、後漢永平十年(西暦七〇年)佛教支那に入る。
二、二年後白馬寺を建て、四十二章經を飜譯した。
三、後漢永平十五年(西暦七五年)佛僧道士と法を鬪はした。
四、後漢建和元年(西暦一四四年)月支の沙門支讖洛陽に來る。
五、同二年安息沙門安世高洛陽に來り大乘經を譯す。
六、光和三年(西暦一八〇年)牟子理惑論を造つて佛儒道の三教を融會した。

七、興平二年笮融佛祠を建てゝ人に誦經せしめて民間佛教を鼓吹した。
八、吳の黃武年間(西暦二二二—二二八年)佛教初めて江南に入る。
九、魏黃初五年(西暦二二四年)月支より支謙洛陽に來り經を譯した。
十、嘉平二年(西暦二五〇年)西天竺曇摩迦羅洛陽に來り戒律を傳へた。
十一、甘露五年(西暦二六〇年)朱士行干闐に至り放光般若を得て歸る。
十二、西晉泰始二年(西暦二六六年)荀勗は佛像十二軀を洛陽に造つた。
十三、永嘉四年西竺の神僧佛圖澄來化して佛教を興隆した。
十四、六年沙門道安經疏を造り麗眉尊者の至るを感じ、之が賓頭盧尊者たるを識りて、像を設けて祭ることゝなつた。
十五、東晉咸康二年(西暦三三六年)尚書李邈宅を捨てゝ靈曜寺を建つ。
十六、同六年王羲之は西竺僧達磨多羅の爲に廬山に歸宗寺を建つ。
十七、大元九年(西暦三八四年)惠遠秦の亂を避けて廬山に至り蓮社を建て淨土の基を啓いた。
十八、隆安二年(西暦三九八年)法顯西天に往ひて法を求めた。

十九、同五年龜茲國三藏鳩摩羅什洛陽に來る。姚秦の主興迎へて國師と爲し、經論多數を飜譯し、又門生に道生以下の八傑を出し三論、成實の二宗を啓いた。
二十、元興元年(西暦四〇二年)天竺佛多羅尊者秦に來りて十誦律を譯出した。
廿一、義熙二年(西暦四〇六年)迦濕彌羅三藏佛陀耶舍四分律を譯出した。
廿二、同六年法顯西竺三十餘國を經て海路より歸國した。是が入竺僧の始である。
廿三、同十四年(西暦四一八年)佛馱跋陀羅華嚴經を建業に譯した。
廿四、元熙元年(西暦四一九年)恭帝は瓦官寺に詔し釋迦佛丈六の金像を鑄造した。
廿五、宋景平元年(西暦四二三年)曇無讖三藏涅槃經を譯し、涅槃宗を開いた。
廿六、元嘉四年(西暦四二七年)沙門惠琳、顏延之と共に朝政に參與した。
廿七、同十一年(西暦四三四年)求那跋摩戒壇を南林寺に建てた。是が支那戒壇の始である。
廿八、北魏太平眞君七年(西暦四四六年)太武帝は詔を下して佛教を破壞した。此れが支那に於ける第一回の排佛である。
以上は支那に於ける佛教傳來以後、三百七十七年に亘る、其の消長史の概況であるが、一言して

之を蔽へば、殆んど無人の野を行くが如く、支那の大陸に獨歩して、上は王公將相より、下は民庶の信仰を博して、多數の經論を飜譯せられたるは、他に其の例を見ざる盛觀であつた。

(十四)南北朝より六朝に至る概況

太武の排佛は爾後五年にして解除せられたるは、即ち太平眞君十一年(宋元嘉二十七年)であつたが、宋の元嘉二十九年(西暦四五二年)、北魏の文成帝の即位と共に、太平眞君の排佛令を改めて佛法興隆の詔を下し、其の翌年には五級の大塔を五台山に建て、太祖以下五帝の爲に佛像五軀を造り赤金五萬斤を要すると云ふ有樣であつた。故に爾後の狀況を列記すれば、

一、宋の孝建元年(西暦四五四年)先帝の忌日に八齋戒を中興寺に設け、又沙門道融に命じて內殿に說法せしめた。

二、大明六年(西暦四六二年)四月八日內殿に於て佛を浴し僧を齋した。

三、泰始元年(西暦四六五年)神僧寶誌奇蹟を顯はす。

四、七年(西暦四七一年)北魏の文帝位を太子に傳へ崇光宮に入りて僧と共に習禪した。

五、泰豫元年(西暦四七二年)北魏の上皇は、天地宗社を祭るに牲牢を禁じて、七萬五千の牲命を活かした。

六、齊の建元元年(西暦四七九年)宋の順帝の禪を受けた高帝は、莊嚴寺に幸して沙門道達の維摩經を講ずるを聞いた。

七、北魏の孝文帝は在位二十九年間に七度佛法興隆の詔を下し、一面には胡服胡語を禁じ、國學を立てた。

八、梁の天監元年(西暦五〇一年)齊亡びて梁興りたるが、武帝は大に佛法を尊び、天監三年には親ら願文を製し、群臣道俗二萬餘人と菩提心を發して、永く道教を棄てた。

九、七年北魏の宣武帝は菩提流支等に詔して太極殿にて十地論を譯せしめ、帝は親から之を筆受し後世地論宗の源流となつた。

十、十年武帝は文を製し誓を立て永く酒肉を斷じた。

十一、十五年(西暦五一六年)北魏の胡皇后は永寧寺に高さ九十丈の塔を建てた。

十二、十六年武帝は牲牢に代ゆるに蔬菜を以てし、道士は一律還俗せしめ、僧を禁中に召して經

文を註解せしめた。內道場の制は此に始まる。

十三、大通元年(西暦五二七年)南天竺の菩提達摩海に泛んで、廣州に到着した。帝は之れを金陵(南京)に迎へて問答したるも、機に契はざれば、達摩は魏の嵩山の少林寺に至り、終日面壁して法を惠可に傳へ、支那禪門の第一祖と爲り、大同元年(西暦五三五年)示寂した。

十四、中大通四年(西暦五三一年)武帝は同泰寺に幸して盂蘭會を設けた。

十五、六年傳翕輪藏を造つた。

十六、八年魏の曇鸞示寂した。

十七、大清元年(西暦五四七年)北齊の惠文三諦(空假中)の理を論じて、天台智者の祖となつた。

十八、承聖元年(西暦五五二年)眞諦三藏起信論を譯して、支那の佛教を一變せしめた。

十九、陳の天嘉元年(西暦五六〇年)眞諦三藏は攝大乘論及俱舍論等を譯した、此の二論は後世の攝論宗及び俱舍宗の源流となつた。

二十、光大二年(西暦五六八年)惠文の弟子惠思は南岳に入りて天台の智者に法を授けた。後此の智者が乃祖の法門を大成した。

二十一、陳の大建四年(西暦五七二年)周の武帝は詔して佛道の二教を罷めた。爲めに北朝の沙門は相率ひて南朝(陳)に歸した。此れが佛教に對する第二回の厄であつた。

二十二、周武の厄は北朝なれば、南朝には影響なく、惠思の弟子智顗(後の智者大師)は其翌七年、天台山に入つて一宗を開いた。

二十三、同十二年(西暦五八〇年)周の宣帝は、詔して佛道の二教を恢復した。

二十四、其翌十三年には、隋の文帝は周の禪を受けて、數百年來三國、五胡、十六國及南北に分裂せし、支那は統一せられ、佛教も大に興つた。

二十五、隋の開皇十年(西暦五九〇年)文帝は天下を統一して僧五十萬人を度した。

二十六、十一年晉王廣(後の煬帝)は天台の智顗(後の智者大師)に從つて戒を受け、智者大師の號を賜ふた。

二十七、十三年達摩の弟子惠可大師示寂した。

二十八、十七年(西暦五九七年)費長房開皇三寶記を上つた。同年十一月二十四日智者大師示寂した。

二十九、隋の仁壽元年(西暦六〇一年)佛經四十六藏を寫し、佛像六十餘萬軀を造つて天下の名刹に安置した。又此時大儒文中子中論を著はした。

三十、隋の大業三年(西暦六〇七年)僧靜琬は藏經の湮滅を怖れ、石刻の願を發したるが、爾後唐宋遼金の數百年を經て完成し、今尙石經山(北平房山縣)に其の全藏を保存せられて居る。

以上は北魏の武帝が排佛令を下したる、西暦四四六年より六一八年即ち隋の世を終りて、唐の高祖の即位までに至る、一七二年間に於ける佛敎の消長せる概要である。

(十五)唐以後に於ける佛敎の概括的結論

唐の治世の三百年間は、佛敎全盛時にして、高祖は即位の二年に正五九の三月及十齊日には、屠釣を禁止して國式と爲したる位なれば、太史令傅奕が廢佛の疏を上つても之れを用ひなかつた。太宗の即位後は大に譯經を奬勵したるを以て、玄奘三藏の如き傑僧が現はれて、印度に留學十有餘年にして歸唐し、梵本六百五十部を献じたるは、貞觀十九年(西暦六四五年)であつた。其の中より七十四部、一千三百三十八卷と云ふ多數の飜譯を完成した。依つて太宗は御製の三藏聖敎序を附して、之れを弘通せられた。故に唐の佛敎は全く支那に於ける唯一無二の黃金時代であつた。隨つて其の傑出せる僧侶には、

三論の大德吉藏、華嚴の始祖杜順、法藏、澄觀、圭峰、淨土門の道綽、善導、律門の道宣、禪門の五祖弘忍、六祖惠能、南嶽惠讓、石頭希遷、法相の玄奘、窺基、惠沼、智周、眞言の善無畏、金剛智、不空等の印度僧より、其の法を傳へたる一行、惠果等の巨人の輩出せること、前古無比にして、韓退之の如き國粹家が頗はれても、之れを如何ともすることを得ざりしが、武宗會昌三年(西暦八四二年)道士趙歸眞の言を聽いて之れを廢せんと欲し、先づ景敎の大秦寺を廢したるが、其翌々五年遂に敕して佛寺四萬餘を毀ち、僧尼二十六萬餘人を還俗せしめた。之れが北魏の武帝、北周の武帝、唐の武宗の佛敎に對する三大厄難なれば、後世之れを三武一宗の難と唱へられて居る。

爾後二年にして帝崩じて宣宗の卽位と共に、大中元年には詔して佛敎を恢復し、五台山に五寺を建てゝ各僧五十人を度し、五年には沙門弘辯を召見して禪の南北宗要を問ひ、圓智大師の號を賜ひたるを始めとして潙山、黃檗、德山、臨濟、洞山、仰山、趙州、曹山、雲門等の禪門の大德は前後して其の化を施し、達摩大士の豫言と稱する『我本來此土、傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成』と云ふ偈を實にして、唐、宋、元、明の四朝に獨步したる期間は、驚く勿れ一千餘年の長年月に亘つ

て居る。何となれば唐の高祖の卽位は西曆六一八年にして、淸の聖神康熙元年は卽ち西曆一六六二年なれば、禪の命脉の長久にして旺盛なりしことは、全く一種の驚異的事實であつた。

しかし之れは、要するに概觀的の議論であつて、之れを、細別すれば天台、華嚴、法相、淨土の四門は、其の間に足を托して其の宗乘を宣揚したるも、其の消長の蹟より見れば、到底禪門の隆盛に比すべくもなかりしが、淸の雍正十三年八月十五日以來、禪の弊害を矯正する爲め、淨土門を鼓吹せられたる結果、禪淨の兼修より進んで淨禪兼修となり、今日では淨土佛敎と化して禪風は地を拂ひ、寧ろ法相とか、眞言とかの復興熱が盛んとなつて來たことは、旣に前項に述べた所なれば再論せず。只其の結論として一言を附加し度き點は支那は佛敎でも、文學でも、亂世になればなる程、其の發達を示すと云ふ特殊の國柄なれば、現在の如き思想の下に、現在の如き混亂を繼續し、しかも交通は世界的になりたる今日なれば、必ずや東西の思想及び宗敎を鑄解して、一の支那式體系の下に、之れを整製するの機を有するものなれば、吾人は刮目して此の機の到來を待つものなるが、夫は三十年後か、將た又五十年後かは、玆に斷言するを得ざるも、必ずや其の時機の到來を信じて、本篇を擱筆することゝした。

東亞研究講座
第三十四輯

支那佛敎の沿革

不許複製
定價三十錢

昭和五年九月七日　印刷
昭和五年九月十一日　發行

編輯兼發行者　東京府西巢鴨町池袋千二百五十八　磯部榮一
印刷者　東京市芝區南佐久間町一丁目七　高山恒三
印刷所　東京市芝區南佐久間町一丁目七　研文社印刷所
發行所　東京府西巢鴨町池袋千二百五十八　東亞研究會
振替東京五八九二九番

東亞研究會既刊書目錄

送料は本會負擔

水野　梅曉著　漢民族の形成せる社會的特調に就て（十錢）
後藤朝太郎著　支那視察旅行の改善（十錢）
吉田　虎雄著　對支ドウズ案と關稅特別會議（十錢）
中山久四郎著　支那の五族共和（二十錢）
小川　節著　支那の排外運動と門戸開放（十五錢）
石田幹之助著　歐米支那學界現況一斑（二十五錢）
鹽谷　溫著　元の雜劇に就て（三十錢）
大村　西崖著　支那の書畫骨董（三十錢）
木村增太郎著　支那を如何にすべきか（十錢）
長野　朗著　支那勞働運動の現狀（十五錢）
笹川　寮著　武昌滄桑記
後藤朝太郎著　武漢三鎭游記（二十錢）
速水一孔著　支那の硯に就て（三十錢）
田邊尙雄著、水野　梅曉著　現代支那の音樂（三十錢）孫文の提唱せる三民主義の梗概（二十錢）
井上　紅梅著　支那料理の見方（二十五錢）
井上　紅梅著　支那人の金錢慾（十五錢）
小森　忍著　支那古陶磁の話（十五錢）
安岡　正篤著　自然と支那文學（二十五錢）
澤村　幸夫著　支那農民の生活（二十錢）
上田　恭輔著　支那の外國借款鐵道の現狀（十錢）
中山久四郎　萬三著　支那語中の西洋語（二十錢）
中尾　漢藥の話（二十錢）
淺野　利三郎著　支那南方思想の發達（二十錢）
上田　恭輔著　清朝時代の滿洲より現狀まで（十五錢）
朱　北樵著　支那服に就て（二十五錢）
武內　文彬著　支那貿易の現狀（二十錢）
榛原　茂樹著　麻雀の話（二十五錢）
金原　省吾著　唐代の繪畫（二十錢）
井上　紅現著　支那人の迷信（三十錢）
本書は著者出版の「迷信」を改題發行せるものなり
岡野　一朗著　支那の產業革命と新經濟政策（二十錢）
澤村　幸夫著　支那漫談（十五錢）
本書は雜誌「支那」に登載せるものなり
三島　泰雄著　日米支の無線問題（二十錢）
田中　忠夫著　支那の士大夫階級（二十錢）
長澤規矩也共著　現代北支那の見世物（三十錢）
智原喜太郎編　「支那展望」一九二九年支那年史（六十錢）
榛原　茂樹著　支那地理の概念（二十錢）
西山　榮久著　支那の財政と公債（二十錢）
濱田峰太郎著　上海人物印象記（五十錢）
澤村　幸夫著

終